

---

# 魔法少女まどか パニック リベンジ

ソースケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか パニック リベンジ

### 【Nコード】

N5182Z

### 【作者名】

ソースケ

### 【あらすじ】

今日も水晶は先日魔法少女になったばかりの少女、さやかをサポートを引き受けていた。

水晶は魔法少女ではない。

しかし彼女は、最近物騒な地域から転校してきた実戦経験者だった。その日は体よく魔女を退治することができ、先輩魔法少女であるバミと祝杯を上げる。

次の日、そんな彼女たちの学校に転校生がやってくるのだった……。

## 第1話（前書き）

ほむらが旅した、違う時間軸のお話です。

性格はかなり違います、大ヒットライトノベル『フルメタル・パニック！』の主人公を意識して書きました。

こんな世界観もありかな、という方はぜひ読んでみてください。

## 第1話

魔女の結界内。

三人の少女が、そこに取り込まれている。

二人の少女が魔女と戦い、もう一人の少女は緊張の面持ちでその戦いを見守っていた。

一人の少女が、魔女に向かって手にしていたライフルを構える。

発砲！

正確無比の射撃。

銃弾は魔女を捉え、その動きを緩慢にさせた。

「さやか、今よ！」

少女の怒号が、あたりに響き渡る。

「わかった！」

さやかと呼ばれた青い布鎧に身を包んだショートヘアの少女が、両刃の剣を大きく振りかぶった。

「もらった！」

振り下ろされた大剣は見事に魔女に命中する。

断末魔さえあげず、くずおれる魔女。

「さやかちゃん、やった！」

今まで固唾を飲んで見守っていたもう一人の少女…鹿目まどか…が、歓喜の声を上げる。

「へへっ、あたしたちのコンビにかかれば魔女なんて……ね、水晶<sup>マジック</sup>？」

「油断は大敵だけどね……でも、私達はいいいコンビだと思うわ」

万が一に備えライフルを構えていた水晶、と呼ばれた長身の少女は、そう答えて警戒を解く。

緩やかに波打つセミロングをかきあげて、その年頃の少女らしくない精悍な顔つきに笑みを浮かべた。

しばらくして空間が歪みはじめ、少女たちの周りに日常が戻ってくる。

もうすっかり、陽は暮れていた。

「あつ……」

さやかが、喜びの混じった声を上げた。  
魔女がグリーンシードを落としたのだ。

「良かったわね」

魔女が存在した場所に駆け寄り、大切そうにそれを手にしたさやかに、水晶は笑みを向けた。

「うん。これでしばらく、また全力で戦えるわ」

さやかはそういつてソウルジェムを手に取り、さっそくグリーンシードに穢れを吸わせる。

グリーンシードがわずかに闇を帯びた代わりに、さやかのソウルジェムが完璧な輝きを取り戻した。

「見事な戦いぶりだったね、ふたりとも」

どこからともなくぴよこん、と愛らしくも奇怪な姿をしたいきものが少女たちの前に現れる。

「キュウベえ。いつから？」

「キミが魔女を打ち倒したところからさ」

さやか疑問に、ニコつと笑ってキュウベえは答えた。

「君たちは本当にいいコンビだ。ところでまどか、水晶……」

キュウベえの声に、真剣さがこもる。

「そろそろ、僕と契約して魔法少女になってくれないか？」

キュウベえのその言葉に、まどかと水晶の二人はあわせて首を横に振った。

「わたしはまだ、命をかけてまで叶えたい願いなんて決められないし……」

「私は友人の手助けをしているだけ。願い事なんて興味ないわ」

「……そうかい」

人間なら肩でもすくめそうな口調でキュウベえはそう言うと、

「まあ、その気になったらいつでも言ってよ。どんな願い事でも、1つだけ僕は叶えてあげられる。その時まで、僕は待ってるよ」

とだけ言い残して、またいずこかへと去っていった。

「……………なんかうさんくさいのよね、あいつ」

キュウベえの気配が完全に消えたのを確認してから、ぼろり、と水晶は本音を漏らす。

「んゝまあ、そうなんだけどね。でも、恭介の腕を完治させてくれたのは確かだし。あたしはいちおう、感謝してるかな……………」

さやかはそう言って、少し顔を赤らめた。

「でも、水晶ちゃんはすごいね。魔法少女でもないのに、さやかちゃんをサポートして……。わたしなんて、みてるだけで邪魔になってるんじゃないかな……………」

「そんなことないよ」

うつむいてそんなことを言うまどかに、水晶はフォローを入れる。

「まどかに見守られてる、ってだけで、私もさやかも、すごい力もらってるよ。特にさやかは、キミの応援に戦う勇気を支えてもらっているよね」

「ん……………まあ、そういうこと」

まどかに照れ笑いをむけて、さやかはぼりぼりと頬をかいた。

「マミ先輩のほうも、片がついてるんじゃないかな？そろそろ、待ち合わせのファミレスに行ってみましょう」

水晶の提案に、さやかとまどかはうん、と声を揃えて返事する。

（それに……キミが魔女狩りについてきている本当の理由も、わかってる。心配しないで。私がっている限りさやかは絶対に守ってみせるし、キミにも、うさんくさい契約をさせることはないから）

水晶はまどかの耳元でそうささやき、力強い笑みを浮かべるのだった。

三人が向かったファミレスは、夕食どきということもあり、結構な混雑ぶりだ。

しかし、先客が三人のことを伝えておいてくれたらしく、ウェイトレスは笑顔で席に案内してくれた。

「みんな無事だったのね、よかったわ」

温かい紅茶を手に、気品のある微笑で三人を迎えてくれたのは、1つ年上のバマリ。

穏やかなオトナの雰囲気を持ち主で、大きなツインのドリルヘアがよく似合っている、まどかたちから見てもほんとうに綺麗な少女だった。

「マリさんも無事でよかった」

さやかはマミの無事を喜び、ドリンクバーをウェイトレスに3人前注文する。

まどかとさやかはマミの正面にすわり、水晶はマミの隣に腰掛けた。

「由縁ゆかりさんも、無事でよかったわ。あなたは、魔法少女じゃないか



ら……。まあでも、貴女に関してはあまり心配してないんだけどね」

「あゝっ、ママ先輩。それはちょっとひどいですよ」

冗談っぽく言うママに、由縁、と苗字で呼ばれた水晶も冗談っぽくむくれてみせる。

彼女のフルネームは由縁水晶というのだ。

「だってあなたは……」

少し周りをはばかりような声で、ママは言った。

「本物の、戦場帰りなものね……」

ママの言葉に、少女たちの周りの空気が、少し重たくなる。

「や……やだなあみんな……。ちょっと育った環境が特殊だっただけで、私はただの帰国子女で……」

そう言つて水晶はあはは……と乾いた笑いを漏らす。

実は彼女、中学2年生の1学期にA国からやってきた帰国子女なのである。

A国の惨状は、それこそ中学生でも知っている。長年内戦や紛争が続いており、そのせいで毎年多くの人が亡くなっている。

そんな苛烈な環境で、水晶は生きてきた。

物心ついた時から少女兵として、戦って生きてきた。

水晶がA国からの帰国子女、というのは学校やクラスの間みんなも知っていることだが、彼女が兵隊をしていた、という事実はこちらに

る3人しか知らないことだった。

「……あつ、わたし、ドリンクバー入れてくるよ。さやかちゃん、水晶ちゃん。ついでに入れてきてあげるよ。何がいい？」

重くなった空気をフォローしようとしたのだろう、まどかがそう言  
って作り笑いの見本のような笑顔を浮かべる。

「あ、悪いね。じゃああたしはオレンジジュース」

「……私も同じので」

水晶の過去の話は、そこまでだった。

あとはまどかの持つてきてくれたジュースで魔女退治の祝杯を上げ、  
年頃の女の子らしい話題で盛り上がり、夜は更けていった。

翌日、朝のホームルーム。

「……というわけで、転校生を紹介します」

今朝の痴話喧嘩の憂さを晴らしてから、担当教諭はようやく本題を  
切り出した。

（……ねえ、まどか。ふつう先に転校生の方を紹介しない？）

（まあ、あの先生だし）

水晶とまどかが席の前後でポソポソ話をしていると、ガラリと教室  
の扉を開けてひとりの女子生徒が入ってくる。

髪の長い、綺麗な少女だ。

今は無愛想な無表情をそのかんばせに張り付かせているが、笑えばきっと、とてもかわいいだろう。

彼女が、最前列の席にいる水晶の前を通りすぎる。

「……」

水晶は彼女から、懐かしくも危険な匂いを感じ取った。

平和すぎる日本では、まず感じることはない匂い。

すなわち、【硝煙の匂い】。

思わず、身を固くしてしまう。

「……」

あちら側も、水晶に視線を送ってきた。

切れ長の瞳から発せられる、冷たい視線。

転校生の少女も、こちらのきな臭さに気づいたのかもしれない。

「どうしたの、暁美さん？」

「……いえ、なにも」

一瞬だけ水晶に目配せをした転校生だったが、何事もなかったかのようにつかつかと教壇の前にやってくる。

「では、自己紹介をどうぞ」

「……暁美ほむらです。よろしく願います」

挨拶を促された転校生は、型通りの挨拶をしてペコリ、と頭を下げ

た。

.....

気まずい沈黙。

「は、はい。では暁美さんのお席はあの空いているところです。それではみなさん、仲良くしてくださいね」

そう言うと女性教諭は、授業開始のチャイムと共に、教室から去っていったのだった。

1時限目と2時限目の間の、短い休み時間。

転校生の周りには、黒山の人だかりがきている。

在校生からのいろいろな質問に、転校生のほむらはテンプレート通りに答えていく。

「.....すこし、いいかしら」

間に入ってきたのは、水晶だった。

ほむらの周りにいたクラスメイトの女子たちが、怪訝な表情を浮かべる。

水晶は物騒な地域からの帰国子女ということもあり、クラスの中で少し浮いていて、さやかやまどか、そして仁美たち以外との接点がほとんどなかった。

そんな彼女が、転校生に興味を示して輪の中に入ってきたのだ。クラスメイトたちが少し戸惑うのも、無理はなかった。

「暁美ほむらさん……っていつの？私も色々聞かせてもらっていい？」

「……どうぞ」

無愛想だったほむらの声に、警戒の色が混ざる。

ただそれは、普通の学園生活を送る中学生には気づくことのできない程度のものであったが。

「どこの中学校から転校してきたの？」

「……中学校よ」

「……知らないわね。どの辺にある学校？」

クラスメイトの女子たちが顔を見合わせる。

中学はこの見滝原中学校からそれほど離れていない場所にある、公立の学校だ。

もちろん水晶とて、知らないわけがない。

「意地の悪いことを言うのね、あなた。隣の学区にある中学校よ」

相変わらず無表情のまま、ほむらはさり、とそう答える。

「あらそう。私も今年転校してきたばかりだから、知らなかったわ。意地悪するつもりなんてなかったの。ごめんなさい」

そういつて水晶はペコツ、と頭を下げた。

しかし、質問を辞めるつもりはないようだ。

「……なにか、貴女アルバイトとかしてる？」

「……しているわけがないわ。だいたい、中学生を雇ってくれるところなんてあるの？」

「ないわね、普通は」

周りにいたクラスメイトたちも、さすがにこの二人の間にある緊張を感じないわけにいなかった。

この二人のやり取りは在校生と転校生の会話、と言うより、まるで水晶からほむらへの尋問のようだった。

「……なにがしたいの？」

「ん……いや、私も海外から今年転校してきた身だから。友達になれたら、と思つて色々聞いてみたんだけど……ちよつと、突っ込みすぎたところまで聞いてちゃったかな？ 気分を害したのなら、ごめんなさい」

水晶は再び謝ると、腕時計に視線を落とした。

「あと休み時間も数分ね。親切に色々答えてくれてありがとう」  
「……」

ひらひらと手を振りながら席に戻る水晶を、ほむらは厳しい視線で見送ったのだった。

続く。

## 第1話（後書き）

こんにちわ、ソースケです。

最後までお読みくださいますて、まことにありがとうございます。  
魔法少女まどか パニツク第1話をお送りしました。

いかがだったでしょうか。

少しでも楽しんでいただけたのなら、幸いなのですが。

タイトルにリベンジ、とあるのは以前似たようなタイプのSSを投稿させていただいていたのですが、残念ながら削除してしまい、今度は絶対にそんな作品にしないぞ！という意気込みです。

このSSは本編に登場した5人の魔法少女全員のハッピーエンド目指して頑張っていきたいと思っています。

読者の皆様、ぜひ応援よろしくおねがいいたします。

それではまた、次話でお会いいたしましょう。

## 第2話（前書き）

ほむらが旅した、違う時間軸のお話です。

性格はかなり違います、大ヒットライトノベル『フルメタル・パニック！』の主人公を意識して書きました。

こんな世界観もありかな、という方はぜひ読んでみてください。



## 第2話

転校生がやってきた、その日の放課後。

「ねえ、水晶ちゃん。1時限目のあとの休み時間、ほむらちゃんとケンカしてたの？」

まどか、さやか、水晶の3人で通学路を歩き、軽い談話を楽しんでいたのだが、まどかが急に話題を変えた。

「ん？いや、ケンカなんかしてないよ」

「でもクラスの子が、すっごい二人の間の雰囲気悪かったって……」

あのあとほむらは『気分がすぐれない』と訴え、どうやって転校初日に知り得たのか、保健委員であるまどかを指名し、教室を出ていったのである。

「ん……。私はそんなつもりなかったんだけど、彼女は私の質問が気に入らなかったみたいね。それでちょっと怒らせちゃったみたいだから、そんな風に見えたのかもね」

そう言つて水晶は苦笑いを浮かべた。

「まあ、転校初日からああいふふうに聞かれたら、やっぱりちょっと気分悪いかもね。水晶もだいぶ、こっちでの生活に慣れてきたようだけど、もうちょっと人の機微ってかさ、空気読めるようになってたほうがいいかも」

「そうね……」

さやかの言葉に、水晶は神妙な表情を浮かべて返事した。  
幼い頃から紛争地帯で育ってきた彼女には、日本女子独特の『空気を読む』という意味がよくわからない。

「あつ、じゃああたし、ちょっと恭介の顔見てくるよ。少しの間、待つててもらえるかな？」

目的地：上條恭介が入院している病院：につくと、さやかがはにかんだ笑顔でそういった。

「うん、わかった」

「急がないから、ゆっくりお見舞いに行ってくるといいよ」

まどかと水晶は、そんなさやかを笑顔で送り出した。

「……さやかの幼なじみつてさ、たしかキュウベえとの契約で、すっかり怪我良くなったんじゃないっけ？」

水晶が小さな疑問を呈すると、まどかは事情を知っていたらしく、それを説明してくれる。

「うん、そうなんだけど……なんでもあれだけの怪我をして、後遺症が全くなしに回復する、ってのは医学的に見て考えられないことらしいよ。それで、こう……いろいろな検査とか調査とか、そういうので入院が長引いてるみたい」

「なるほど、一種のモルモットってわけか……」

率直な意見をぽろりともらした水晶に、まどかは苦笑いを浮かべた。

「少しの間、ってさやかちゃん言ってたけど、話し込むと長くなる

かもしれないから、わたしたちも病院の待合室で待っていていようよ」

そういうまどかに水晶はそうだね、と軽く返事して、病院内へと入っていった。

「いやあ、ごめんごめん。すっかり話し込んでしまって。恭介も入院生活が暇らしくて、なかなか帰してくれなくてさ」

などとさやかが照れ笑いを浮かべながら二人の元へ帰ってきたのは、小一時間が過ぎた頃だった。

「ん、大丈夫だよ。わたしたちもおしゃべりしてて、退屈しなかったから」

笑顔でそういうまどかに、水晶もうんうん、と嫌な顔ひとつせず相槌をうつ。

「お詫び、って言ったらなんだけど、ジュース奢らせてもらうから！ここからだ……病院の外にある喫煙所前の自販機がちょうど帰り道で近いかな？」

「そんなこと、気にしなくていいのに。でも、せっかくそう言ってくれるんなら、ごちそうになるうか、水晶ちゃん」

「そうだね」

さやかの提案に二人は同調し、病院の外に出て自販機に向かう。

それをみつけたのは、自販機の置いてある場所のすぐそばだった。

「さやかちゃん、あれ……」

不安げな顔で、まどがか一角を指さす。

「……グリーンシールドだね。しかも、孵化しかかってる……」

拳より二回りほど小さいそれは、黒い靄を放出し、ドクンドクンと波打っていた。

「さやかちゃん、これって放っておいたら魔女になっちゃうんでしょ？」

「そうだね」

「今のうちに何とかできないの？」

「うーん……ヘタに刺激すると、すぐに孵っちゃうかもしれないし……マミさんに見てもらえれば、あたしの手に負える魔女なのか分かるんだけど……」

新米魔法少女のさやかは、魔女狩りのときはいつもマミに今の彼女でも戦える魔女かどうか判断してもらってから、戦いに赴いているのだ。

「でも、放っておくわけにもいかないな……」

病院というのは、体や気持ちが悪っている人たちの集まりとも言える。

そんな場所で、魔女を孵化させる訳には行かなかった。  
なによりここには……恭介が入院している。

「まどか、マミさんを至急呼んできて。あたしはここで、グリーンシールドを見張ってる」

「わかった！」

さやかは言葉を受けて、まどかは慌てて駆け出していつてくれた。

「水晶。申し訳ないんだけど、いざって時のサポート頼んでいい？」  
「OK」

そう返事すると、水晶は一見バットか竹刀でも入っていそうなケースを手元にたぐり寄せた。

この中には、長年愛用しているライフル銃が入っているのだ。もちろんこれをケースから取り出すのは、魔女の結界に完全に取り込まれてからだ。

その結界が、グリーンフィールドを中心に、だんだん日常を侵食し始めた。

「ねえ、水晶」

「うん？」

魔女狩りや教室では、大抵まどかと一緒にいることが多い。ふたりきりの今は、いい機会だと思えた。

「どうして、こんな危険なことに付き合ってくれるの？あなたには、なんの見返りもないのに」

さやかの疑問に、水晶は短く答える。

「友達だから」

「そっか……ありがとう」

さやかのお礼に、水晶はポリポリと鼻の上を掻くだけだった。

「あとさ……」

「うん？」

「どうして、水晶はまどかが魔法少女になることに反対なの？あたしが魔法少女になろうとした時も、マミさんやキュウベえの話を聞いて、猛反対したよね」

「それは……」

水晶の視線が、宙に浮く。

なにか、言葉を探しているような感じだった。

「闘争とは無縁なキミたちを笑顔を見ると、私はとても幸せな気持ちになれるの。いや、そりゃキミたちにもいろいろあるのは分かっているわ。でも、日本で暮らしていたら実感しにくいと思うけど、キミたちは奇跡のような平和を享受しているのよ。そんなキミ達が、わざわざ戦いの世界に足を踏み入れることはないんじゃないかな、と思うだけ」

「……」

普段は忘れがちだが、水晶はそれこそ、さやかたちには想像もできないほど過酷な過去を生き抜いてきている。

彼女の口調は平穩そのものだったが、それだけに実感がこもっており、さやかはそれ以上言葉をつなげることが出来なかった。しばらくして、ふたりが完全に魔女の結界に取り込まれる。

パキ……パキパキ……

「っ……もう孵りそうね」

さやかは覚悟を決めたらしく、ソウルジェムを輝かせて魔法少女に

変身し、臨戦態勢に入る。

もう魔女がグリーンフシードから出てくるか……そんな時だった。

「おまたせ！」

まどかが、マミを連れてやってきてくれた。

「ま、間に合った……」

さやかは安堵の溜息をもらす。

まだまだ経験の浅い彼女にとって、強さや属性のわからない魔女との戦いは避けたいところだった。

「お出ましのところ悪いけど、一気に片をつけてやるわ！」

マミはそう叫ぶと、出てきたばかりの魔女を得意のリボン操作で拘束してしまい、そして魔力で召喚したマスケット銃を手に取って銃弾をなん発がお見舞いしてやる。

ベテラン魔法少女らしい、手際のいい洗練された動きだ。

マミの連続技を受けて魔女は大きく吹き飛ばされ、動きが緩慢になった。

「これで……！」

マミが、必殺の大砲を構える。

その瞬間だった。

拘束され、瀕死だったはずの魔女の口から、巨大なピエロの首のようなものが吐き出された。

「…………え？」

それは大きく口を開け……。

チュイン！

マミの後ろから、銃弾が飛弾した。

水晶の射撃だった。

実戦で鍛えあげられた危険への嗅覚が、マミの楽勝ムードが漂っていたなかでも、水晶を決して油断させなかった。

その銃撃を受け、一瞬だが魔女の動きが止まる。

ようやく危険を察したマミが、とっさに身をかわそうとした。

「きつ…………きやあああああつ！」

この世のものとは思えない悲鳴が、マミから上がる。  
なくなっていた。

左腕が。

根元から。

あの魔女の巨大な口に、持っていかれたのだ。  
おびただしい量の血液が、傷口から流れ出る。

「まどか！マミを見るな！」

そう叫ぶと、水晶はまどかを地面に押さえつけた。

こつという時、一番怖いのが戦闘や負傷に不慣れな者のパニックである。

それから脱兎の勢いで負傷したマミを抱え込み、その場から離脱させた。

幸い魔女は、食いちぎった彼女の腕を味わうのに夢中のようなだった。



「マミさん！マミさん！」

さやかがあわてふためいてこちらへ駆けてくる。

「うわあああつ！いたい、いたいっ！すごくいたいっ！左腕が、すごくいたいっ！」

マミは失った左腕を凝視しながら、泣き叫び、激痛にのたうち回る。いつの間にか魔法少女の服装は解けてしまい、腕から流れる血液がマミの制服を穢していった。

「あわてるなっ！」

水晶はまず、パンツ！と軽くさやかに平手を入れて平常心を取り戻させる。

「さやか。魔女のヤツがこっちに来たら、キミが魔女と戦うんだ。マミ先輩の応急処置がすんだら、私も加勢する」

「でも……マミさんでも負けちゃう魔女相手に……」

「つべこべいうな！お前の両腕は男の背中に引つかき傷をつけるためだけにあるのか！？」

「っ……！」

深い意味はわからなかったが、水晶の迫力に押されて、さやかは大剣をまだマミの腕を貪っている魔女に向けた。

「それから……ひどく気に入らないが、キミの使えるテレパシーとやらで、キュウベえに連絡をとっておいてくれ」

そうさやかに言い終えると、次に負傷したマミにカツを入れる。

「ぎゃあぎゃあ喚くんじやない！あなたも、歴戦の勇者だろう！止血点はわかるか？ここだ、ここをしっかりと抑えろ。思いきりだ」

水晶の怒声に、マミはわずかに落ち着きを取り戻した。

ガタガタ震える右手を水晶に誘導された止血点にあてると、ぎゅっ！と言われたとおり全力で押さえる。

「よし、それでいい」

水晶は自分のバストからブラジャーを外し、それをひもがわりにしてマミの出血部をきつくきつく縛り上げた。

それからカバンの中に入ってる医療キットをひっぱり出す。

魔女狩りについていくようになってから、いつでも怪我した魔法少女達の応急処置ができるように、兵隊時代の装備を持ち歩くようにしていた。

慣れた手つきで注射器を取り出して薬物を吸わせてから、駆血帯でマミの細腕を縛りそれを静脈に注射する。

薬を打たれたマミは、うう……と小さな呻き声を上げて、昏睡状態にはいったようだ。

「マミさん、大丈夫なの……」

顔面蒼白のまどかが、不安げな表情で水晶に尋ねる。

「ああ。血は一応止まったし、薬で眠らせたから無駄な消耗もないだろう。ただ……問題はあいつだな」

マミの腕を食い終わった魔女は、次なる獲物を求めてこちらへ視線

を向けてきた。

「来る……！」

「そんな気配だな……」

さやかが大剣を構え直し、水晶も7年間使っている愛用のライフルを魔女に向けた。

「まどか。万一さやかと私が倒されたら……もうすぐやってくるはずのキュウベえと契約して魔法少女になって、ヤツを倒してくれ。生きてさえいれば、なんとでもなる」

「水晶ちゃん……」

「願い事なんて何でもいい。本当はキミにそんなことをさせたくないんだが、死ぬよりはましだ。いいか、生きていれば……」  
「……その必要はないわ」

どこかで聞いた、醒めた少女の声。

魔女がこちらへ襲いかかってくる……！  
そう思った瞬間だった。

「！？」

何が起こったのだろう。

大爆発が起こったかと思うと、魔女は一瞬のうちに四散し、コッソ、と新しいグリーンフシードだけを残して消えてしまった。  
周りの景色が、日常を取り戻す。

「ほむらちゃん……？」

その少女は今日転校してきた暁美ほむらだった。

彼女はまどかを一瞥すると、グリーンシードを拾い上げ、スカートのポケットになおしこむ。

「あんた、魔法少女だったの……」

さやか of 質問にも、ほむらは何も答えなかった。

「……曉美さん。すまないが礼はまた後日させてもらう。こっちは負傷兵がいるもんでな」

こんこんと眠り続けるマミを背負い、水晶は形だけほむらに頭を下げた。

助けてくれたのは事実であったが、こいつもこいつでどうも、信用できない所がある。

「マミ先輩の自宅は、こっちだったな……」

わざとらしく呟くと、水晶は病床兵を背負っているとは思えない速さで、その場をあとにしたのだった。

「……マミさん、大丈夫なの？」

自宅のベッドに横たわり、規則正しい寝息を立てているマミを、心配そうにまどかが覗き込んだ。

「うん、命に別状はないと思う。ただ、病院に連れていくわけにも行かないわね……」

そういう水晶に、まどかとさやかが顔を見合わせる。

このような怪我を負ってしまった原因を、医者にどう説明すればいいのだろう。

彼女たちには、女子中学生が片腕をなくすような事情を、うまく嘘でごまかす自信がなかった。

「消毒薬と抗生物質ぐらいは手に入るから、しばらくは私がマミ先輩の面倒をみるわ。それに、魔法少女って怪我には強いんでしょう？」

「うん、確かにそうだけど……」

さやかが自信なさ気に応える。

彼女も魔女狩りで多少の怪我の経験はあったが、四肢を失うほどの怪我の経験は、さすがになかった。

「じゃあ私は早速家に戻って薬を取ってくるわ。キミたちはもう、家に帰ったほうがいい」

そういう水晶に、さやかとまどかは首を横に振った。

やはり、マミのことが心配なのだろう。

「……そう。じゃあせめて、親御さんには連絡しておいてね」

水晶はそう言って、一旦自宅に戻ることにする。

マンションのホールを出ると、もう宵闇があたりを支配していた。

「マミは、助かったようだね」

感情の全くこもらない声。

白く、愛らしくも奇妙な姿をした生物が水晶に話しかけてきた。

「……キュウベえ」

「あれだけの怪我をしたら、普通は助からないものさ。腕をなくしてしまつたら戦闘不能に陥るだろうし、大怪我をしたショックでパニック状態になる子もいる。マミが助かったのは、キミのおかげだろうね」

「……マミ先輩は、立派な戦士だった。怪我のあと問わずかに混乱しただけで、あとは私の指示にきちんと従ってくれた。マミ先輩が生き残ることができたのは、彼女の強さだ」

「……でももう、マミは戦うことができないだろうね」

「そうだろうな。残念だが、魔法少女は引退つてことになるだろうね」

水晶がそう言つと、キュウベえは何か一物含んでいそうな笑みを浮かべる。

「ん？君は何か、勘違いしてないかい？」

「勘違い……？」

「そうさ。魔法少女になつた以上、彼女たちは戦い続けるしかないんだ。そういう契約だからね」

「なにをバカな……！」

珍しいぐらいに憤り、水晶はキュウベえの首根っこを掴んで持ち上げた。

「四肢を喪失した兵士が、戦えるわけがないだろう！？貴様は兵に犬死しろといっているのか！？」

「そんなこと、僕は知らないよ。とにかく、魔法少女になつてしまつたら、彼女たちは魔女を狩り続けるしかないんだよ」

「ふん、勝手に言つてろ。戦う、戦わないは個人の自由のはずだ。」

さやかだつて、いつまでも半人前じゃない。私もサポートにつく。  
マミ先輩が戦えなくても、この街を魔女から守ってみせる」  
「やれやれ……」

意気込む水晶に、キュウベえはわざとらしくため息をついた。

「魔法少女になる、ということはそういうことじゃないんだよ。意識的に魔力を使わなくても、彼女たちのソウルジェムは濁ってくる」

「それがどうした」

「そりゃしばらくは大丈夫さ。でもね、ソウルジェムが濁りきると

……」

「どうなるっていうんだ」

「さあね？それは君が魔法少女になって確かめてみればいいんじゃないかな？」

馬鹿馬鹿しい。

水晶は、これ以上キュウベえの話を聞く気になれなかった。

ふん、と嘲笑のはな息をついてから彼を解放し、薬をとり自宅へ足を向ける。

そんな水晶に、キュウベえはいつもの平坦な声で語りかけた。

「水晶、君は人を殺しているね？それも、たくさん。10や20で、利かない人数を殺しているはずだ。それに、その奇抜な名前も、君の本当の名前じゃないね」

続く

## 第2話（後書き）

こんばんわ、ソースケです。

魔法少女まどか パニツク第2話をお届けしました。

少しでも楽しんでいただけたのなら、幸いです。

さて、今回はマミさんが例の魔女と決闘するシーンを書いてみました。

ハッピーエンドを目指す、と宣言している以上、ここでマミさんに死んでもらうわけにいきません。

しかし、戦う上で大きなハンディキャップを背負ってしまいました。これから彼女が自分の運命にどう立ち向かっていくのか。そのあたりも楽しみにしていただけたらな、と思います。

今回は水晶の過去と、マミさんのこれからのお話になっていくと思います。

よろしければ、これからも応援よろしくおねがいいたします。  
ではまた、次作でお会いしましょう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5182z/>

---

魔法少女まどか パニック リベンジ

2011年12月20日19時50分発行